

札幌新まちづくり計画市民会議
文化・人づくり分科会第2回会議概要録

日 時 平成15年12月25日(木) 18:00~20:00

場 所 札幌市民会館 2階 第2会議室

出席者 臼井 博 会長
阿部一司 委員 ・ 飯塚優子 委員 ・ 大沼義彦 委員 ・ 杉森洋子 委員
高田悦子 委員(経済・雇用)

次 第

- 1 開 会
- 2 議 事
 - (1) 副会長指名
 - (2) 前回のまとめ
 - (3) 意見交換(委員提言の趣旨説明、現状と課題)
 - (4) 議論のまとめと次回の議題確認
 - (5) その他
- 3 閉 会

議事の概要

最初に、前回の議論について確認がなされた(資料1)。
続いて、各委員より、提言の趣旨説明と活発な意見交換が行われた。
最後に、議論のまとめと次回議題確認、日程の確認の後、閉会した。

意見交換の概要

委員提言の趣旨説明

阿部委員

- ・ 国や民間業者ではなく、住民と自治体が自分たちのまちの将来像を考えた政策が必要。
- ・ まちや公園のあり方については、民間業者ではなく札幌市が主体となって住民と話し合うべきである。
- ・ 目先の5年、10年ではなく、50年、100年後を考えたまちづくりをしなければならない。
- ・ アイヌ民族は、生きているもの、命あるものすべてがともに生きているという考え方を持っている。人間中心の考え方ではない。
- ・ 自分たちの都合だけで木を切ってはいけない。阪神・淡路大震災でも大きな木がたくさん植えてあったらあんなに人が犠牲にならなかったかもしれない。
- ・ 100年前、札幌市にははたくさんの川が流れていた。今はほとんどの川がふたをされてしまっているが、ぜひ川を復活させたい。
- ・ 人や車が通らないところも全てコンクリートでふさいでしまっている。できるところははがしてほしい。
- ・ 河川のコンクリート護岸を自然の状態に戻し木を植えることもできるのではないか。
- ・ まちの美観を高めるために電線の地中化を。
- ・ ヨーロッパのような広告の規制がまちなかをきれいにするためには必要。
- ・ 自転車の交通死亡事故が増加している。駐車違反規制も含めた交通規制が必要。
- ・ 21世紀には自然と共生する英知が必要。
- ・ 北海道の99%の地名はアイヌ語の日本語表記。両方を並記すれば地名の原点となった地形や自然環境、歴史、生活について子供たちに教えられるのではないか。ノルウェー、フィンランド、スウェーデンはサーミ語地名を並記している。
- ・ アイヌ民族の伝統的な文化を広く市民に普及、啓発してほしい。また、日本は多民族、多文化共生の国であることを市民に伝えていきたい。
- ・ アイヌ民族の伝統的生活空間を道が中心になって各地に指定したりという動きがあるが、これに合わせて札幌市の文化振興、観光産業振興も行ってほしい。
- ・ 公教育で総合的なアイヌ文化学習を進めることは、北海道の自然や歴史、伝統文化、自然保護、異文化理解、人権教育を学ぶことにつながるのではないか。

飯塚委員

- ・ 地域の文化を高めるには行政が管理する施設だけでは不十分。民間施設の活用も必要。
- ・ 民間施設の活用を興行場法に関する条例と都市計画用途地域の制限が阻害している。これらの緩和、運用見直しが必要。
- ・ 青少年教育ということに限っても、さまざまな市民団体や行政機関、学校が多くの活動をしているが、つながりがないために活動を知られないケースがかなりある。行政の縦割り組織改革、横の情報提供の手段が欲しい。

大沼委員

- ・ この市民会議の権限があらためて問われなければならない。つまり、ここでの提言はどの程度反映されるのか。反映されなかった場合には、ある程度の説明が必要になる。
- ・ 芸術・文化、スポーツの問題としては、それが発揮される場所ということと、それをどのように次代につなぐのかという2つの問題がある。
- ・ それをやっている機関には学校や企業、NPO、NGOがあるが、それらがぶつ切りにされている。それらをつなぐ環境、ネットワークが必要。

- ・ 文化、スポーツの資源は道内では札幌に集中している。しかし、それが市民に歓迎されているかどうかは別問題。例えばワールドカップを見に行けた札幌市民は1万人いたかどうかだし、サッカーをできる環境ということでは大きなギャップがある。
- ・ 外で遊ぶ子供の減少や、塾通いする中学生の割合が8割に達しているというように、子供の育つ環境は変わってきている。そういった中でスポーツや文化に触れるのはそもそも可能か。これまでのシステムでは対応できない事態が進行している気がする。
- ・ 札幌らしさを何で出すのかも課題。例えばフィンランドには冬に森の中でクロスカントリースキーをしたりして過ごすという伝統がある。スポーツ＝競技ととらえがちだが、その裏側には生活や文化がある。
- ・ 札幌は広すぎて、さまざまな環境整備をするにしても全市的に対応しきれないということもあるかもしれない。枠組みや範囲設定についても考えなくてはいけない気がする。
- ・ 文部科学省が総合型地域スポーツクラブ事業を札幌の藤野でも行っているが、地域に指導する人材がいるのかが問題。また、塾通いする子供がスポーツクラブに来れるかという問題もある。
- ・ これまでは学校で文化鑑賞会や音楽鑑賞会などの文化体験が行われてきたが、それがどんどんカットされたり、PTAや町内会活動に追いやられている状況がある。地域ではどこまでできるのか、どのように支えるのかを考えなければならない。
- ・ 札幌にはスポーツ振興事業団という施設管理、各種行事運営をしている団体がある。この業務を民間委託するという議論もあると思うが、そのときにはこの団体が培ってきたノウハウの評価、市民にとってサービスや利便性低下にならないかどうかを考えなければならない。

意見交換

高田委員

- ・ 阿部委員の100年後を考えたまちづくりという提言に共感する。
- ・ 経済と文化はまちづくりの裏表である。
- ・ 札幌は経済、物流の集散地というだけで、小樽や函館のような「らしさ」がないと感じる。
- ・ 観光資源としてもアイヌ伝統文化の伝承は大事ではないか。まちの中に博物館があればもっと認識が高まるのではないか。
- ・ 子供にとっても大人にとっても自分を表現するのは素晴らしいこと。学校教育の学習発表会等でも学校や先生だけが一所懸命になるのではなく、親が加わって子供の教育について認識することで子供たちの教育のレベルアップにつながるのではないか。
- ・ 江別の公民館の改築にあたって市民が署名運動をしたり運営にもたずさわったりしていると聞いている。お金をかけるだけではなく、市民の発想でやることも大切。

飯塚委員

- ・ 富良野市では市がつくった「富良野演劇工場」という劇場の運営を「富良野演劇工房」というNPOが受託している。
- ・ これからのNPOは、民間けれども公を担うものということで、収益を上げながら運営していくという方向に向かっていくはずだし、そうでなければ意味がないと思う。大沼委員から「誰がそれを担うのか」という話があったが、民間がそこまでいかないと現状は打開できない。
- ・ 今までの学校教育は正しい答えは一つというものだった。しかし、100人いたら100人の正解があるという成長の仕方もある。演劇を活用してそういう教育ができる

と思う。これを学校教育に取り入れるのは難しいかもしれないが、だからこそ、地域、民間を巻き込んだ子供の教育が必要なのではないか。

Q 総合型地域スポーツクラブの成功事例はあるのか。(白井会長)

A 愛知県半田市の成岩スポーツクラブがよく紹介される。そこでは部活を週3日にし、それ以外の曜日は地域の人たちが教えるようにした。また、中学校の体育館をクラブハウスのように利用したりしている。(大沼委員)

大沼委員

- ・ それに近いこととして、札幌市には小学校レベルに町内会がベースとなった体育振興会という組織があるが、だいが求心力が弱まっている。それをもう一度どのようにセットアップするかというのが課題。
- ・ 80%の子供が塾に通っている現状は子供にとってきついことだと思う。道内では札幌が飛びぬけて塾に通う人数が多く、また、部活を辞める率も高い。
- ・ 札幌には人材はたくさんいるので、総合型地域スポーツクラブの可能性はあると思う。
- ・ 教育の中で自然と接する回路が切れている。また、キャンプ場でテレビをつけるというような変な野外活動も多く、自然とつながる手がかりをどんどん失っている。それを生み出さないと自然とつながっていかないという気がする。

阿部委員

- ・ アイヌにはユーカラという何百年と続く口承文学があり、そこには社会規範だとか自然、神様に対する考え方が書かれている。
- ・ アイヌには狩猟採取民族ならではの「腹八分目の考え方」があり、それがすべての社会規範にある。生きているものすべて、動物も植物も人間もみんな同じなので、獲るにしても八分目にしておこうという考え方である。
- ・ アイヌには人と争ってはいけない、責めてはいけないという考え方がある。
- ・ 親が他人と競争しながら生きているのに「お前は立派な人間になれ」と子供に言ってもそうなるわけではない。
- ・ 北海道では昔はもっと魚が獲れたのだが、木を切り森を破壊したために海に栄養がいなくなり、そして魚もいなくなってしまった。
- ・ 家にしても、アイヌにはみなさんのおかげ、自然のいろんな神様のおかげで住まわせていただいているという考え方がある。
- ・ これらの先住民族の価値観、英知をぜひ札幌の公教育に取り入れて共有できるようにしてほしい。

杉森委員

- ・ 不登校の子供たちにとっても、小さな表現の場はすごく大事。Kitaraや大きなホールでクラシックを聞くことはしないが、音楽ライブなど、自分が認められることに対してはとても意欲的に取り組んでいく。
- ・ 公共施設が大らかに運営されている反面、運営が苦しい小さな表現の場に対して公の支援がないことは疑問。金銭的な支援などがあってもいいと感じる。

高田委員

- ・ 文化というとソフトから歴史的建造物まで非常に幅広い。どこに切り口を設けるかということがあがるが、経済を考えると、札幌のまちが活性化しなければ生活文化が向上

しないということが言えるのではないか。

- ・ 例えば、大通に日本全国から大道芸人をつれてくるようなイベントがあったら面白いと思う。大道芸人のイベント「だい・どん・でん！」に市から助成金が出ているということもある。
- ・ 札幌に歴史的建造物は少ない。豊平川でカヌーをするというようなソフト的な観光スポットをどんどんつくっていくことが必要だと思う。
- ・ スロー、カントリー的なことの必要性もよく分かるが、一方で、職がない中で子供たちにいろんな勉強をさせなければならないということもある。その両方のバランスが大事だと思う。

Q 大道芸人については、東京都で取り組みがされていると聞いているが。（臼井会長）

A 認定制にして、決まった場所では許可なしにできるようにした。大道芸のまちとしては全国に有名なまちが3つも4つもあって、それぞれに特徴がある。（飯塚委員）

- ・ レベルの高い芸術とコミュニティアートの両方が必要。（飯塚委員）
- ・ 「だい・どん・でん！」は企画運営主体が変わってからはフリースクールに連絡も来なくなってしまった。公が関わるとはじかれるような気がいつもしている。（杉森委員）
- ・ 海外の演劇祭などでは招待公演のほかに誰でも参加できるようなイベントも同時に開催される。そういうふうに広がらないとつまらない。（飯塚委員）
- ・ イベントが大きくなると保安だとか警備という問題が大きくなるが、大胆な発想をしないと続けられないし、広がらない。（高田委員）
- ・ イベントをするためにはノウハウがある。民間のノウハウを持っている人を活用することが必要。（飯塚委員）
- ・ ゲストを呼んできてやらせるというのではなく、ホストも楽しまなければだめだと思う。ビッグネームが来てても、そこに暮らす人が豊かになるということがなければ面白くないし細くなっていく。（大沼委員）
- ・ YOSAKOIは民間からの発想。始めは小さかったが今は札幌まつりよりすごい。衣装にしても、すごい経済効果がある。（高田委員）
- ・ YOSAKOIが成功したのは自分たちでつくったものを発表して自分たちが楽しめたから。そういう場を演劇であれ音楽であれつくればいい。（大沼委員）
- ・ ワールドカップというのはFIFAという興行師による興行のようなもの。市がそれに便乗して何かをやるということではできなかったそうだ。（大沼委員）
- ・ 札幌独自の、みんなが「踊れる」ようなものが大切だと思う。（高田委員）
- ・ 文化には「享受する」という面と、「参加する」という両面がある。小さな活動、底辺を育てていかなければ、優れた技術を持った人が来てても、それを鑑賞したり評価する力を持ってない。そこで教育につながっていくということがある。（臼井会長）

Q 劇場の条件緩和についてだが、興業場法や用途地域をもう少し弾力的に運営することは可能か。（飯塚委員）

A 興行場法に関する許可は札幌市の保健所の担当だが、基準自体は道の条例に基づいているので、それが変わらないといけない。用途地域の指定は市の管轄だが、その制限は法律で決まっている。ただ、個別に地域住民の理解、合意を得た上で特例的に許可されるという道はある。（事務局）

- ・ 文化の根っこを育てるためには、行政がつくった施設では足りない。民間の小さなところが活動できるような状況が必要だが、そのためには法律の改正も必要かもしれない。（飯塚委員）

高田委員

- ・ 地域のPTAと学校が一緒になって協議会をつくり子供の教育をするという中教審の中間報告があるが、札幌はそれをもっと実践していくべきだと思う。
- ・ 教育大附属小学校以外に教育の実践校をまちなかに作り、実験教育をどんどんやってみるということも必要だ。

議論のまとめ

白井会長

- ・ 今日のとめとしては次の3つの観点になると思う。
- ・ 1つ目はソフトというキーワード。いろいろな活動を行うバリアの一つに法がある。建物や施設を増やすよりも、規制、条例、法を柔軟に運用していけるような働きかけが必要である。
- ・ 2つ目は連携。民間や行政、地域、教育機関のいろいろな活動をつなぐようなシステムを考えていかなければならない。
- ・ 3つ目は価値観の問題。自然観、人間観という価値観を教育の中にしっかり位置付けることが大事である。